

山茶花は淋しき花よ冬の日

うす紅に咲きにけるかも

我が友は冷たく睡る晩秋の野に

また思ひ出しぬ懐しの西

我が村里より

たはれをこそしらばそしれ美しき

ここのみ我は思へるものを

涙もて水を見る日の多かりき

河岸の柳に日の暮るゝころ

赤々と夕日淋しく照り映ゆる

山の麓の人の子の家

おぼつかたまばろしの世に我來しと

朝の霞こめし町ゆく

西の空眞紅に燃わて碧桐の

一葉揺れなく静かなりけり

朝明けの町のじづけさ懐しみ

戸をくれば日は上りてありし

愛でし雪

朝雨の煙れる蔭にしらん

野の雪見わて鴉鳴くなり

雪降れる都の空の灰色に

おほほしきかも煤煙しみゆく

空高く青き樹ゆらぐそのあたり

降り来る雪のしら／＼と見ゆ

水仙よ、花はなつかし人に戀ふる

身につゝましく咲きにけらずや

別れて来て又逢ふすがなきごとく

淋しく暮るゝ雪の夕暮

霜葉枯木

三乙 松宮 誠一

伊勢に拜りて

手を洗ふ同じ水でも五十鈴川

湊 川

すゝきまで昔を語る湊川

ほとゝぎす口あらば聞かせ湊川

己までも泣けてくるかな湊川

寒月

月寒し亡き子に似たる聲のする

寒月やとばかりとせぬ池の水

案山子

裏の柿見てたら／＼と案山子殿

秋の田の捨てられ案山子の浮世かな

引く弓にもたれて御座る案山子どん

明月

瓢たんで出掛けや月は出てくれず

お月どん出てくれ薄が笑ふわい

雪

見渡せばお江戸は今雪の中

夜半の雪松からふるひおちる音

今朝の雪軒の雀にひやかされ

品川の沖は千鳥か吹雪かな

漫筆

百なりも重さに堪へず枯れにけり

元日や此の心にて終りたし

年の暮たよりにならぬこの定め

時折の歌

三丙 木村 謙次

夏

海の子よ寄せては返へす波を見よ

心ははげみ身はおどるべし

つどに起き潮にひたる心地よき

村人ならで知るを得べしや

夜に入りて雨はあがりぬ庭の松

ぬれし梢に螢光かれり

秋

ともしびの止かぬ部屋の片隅に

こほろぎぞなく壁をはひつゝ

空すみて日の照り来ればほのぼのと

垣根の石に湯氣の立つ見ゆ

人の身もさこそあるらめ朝顔の

咲くと見しまよいつしかしぼむ

□

唯一人落葉踏みつゝ歩みけり

幼き時の我を思ひて

師を送る悲しき日なり停車場に

ひた降る雨を涙とぞ見る

身を思ひ心を思ひ給ひつる

母の心の有り難きかな

氣にいらぬこともあるだろ此の俺の

足らぬは許せ親しき友よ

ふとさめて窓ごしに見る大空は

うす曇るまゝ明けて行くなり

俳句

反古より

五甲 中川治郎吉

蜘蛛の巣に蟬殻投げて見たり鳧

霧流る城一角の夕陽哉

月に澄む蘇鐵樹のかげ動揺す

大根の葉風一陣東天紅

待ち厭む驛の狭さや三日月

咳一つ秋は終をつげてけり

晩秋をうつ梵鐘の澁み哉
秋晴や天に向つて雄叫す
薄氷を破る響の小氣味よき
碧空にくぐりはるけき雪の嶺
機會を待つ兵襲ふ村時雨

『紅葉』

三甲 名畑榮一

石投げて見下ろす谷の紅葉かな

見返れば又惜まるゝもみぢかな

藪蔭に見る人なくて散るもみぢ

紅葉橋かけ渡しぬる小谷哉

さゝ流る小川に浮ぶ紅葉かな

『霜』

露營して衣さし通す夜半の霜

大霜や倒れ案山子の簑白し

犬の子鳴こけ淋ししも夜かな

外へ出てちよつとふみ見る霜の原

床はなれ寒さ身にしむしもの朝

球それて草花の中に落ちにけり

弟の草花摘むや暑き晝

夜の市人に買はれし金魚かな

吊瓶に白のまだらの金魚かな

理髪店の鏡に泳ぐ金魚哉

つかむ手の裏を這うたる螢哉

雑草

三甲 藤野

豊

夏の夜のうるほひや木立こんもり

闇に咲く花か夏のエメラルド

暖き月夜はノスタジヤの一つ星

しめやかに語り行く後に月が笑ふ

朝は小鳥の唄聲に小枝がゆれてゐる

乙女ら唄ふ草原軽き足ざり

若葉にほつと吐息する牛の匂ひ

讃美歌の灯ゆらゆら花が散る

私のスタデーに一日動いてゐた時計

禮拜の鐘がなる黄昏の花

めざめてある程に雨の音しみじみと

ドームの空の廣々とする秋

流浪の月日かくされぬ白粉の女

燃ゆるばかりの風吹いて裏町の窓

乞食の唄が明るい裏町の暗

暗よ、暗よ、裏町に何にを求めて

生きて求むる苦しみを知る夜の寂寞

風吹くまゝにほふダリアの畑

我が思ひ一すじに連りて朝となる

紫の煙ゆらゆらスタデーの静もり

秋の來る山に小供の聲がする

花ひさぐ小供の聲の消えさうな朝

順禮の物こふ朝に鈴が鳴る

西日落ちたる時

三甲 北川壽三

葉櫻や師の喪にこもる庭の雨

春雨やほのかに煙る山の寺

若水のこぼるゝにさす旭日かな
 暮に勝つて微醉に菊を賞しけり
 ほろ／＼と桃散る雞の餌水かな
 行く春を柳に暮るゝ家一つ
 雨降ればかはづ鳴くなり池の面
 つゆ深し病舎の壁に秋の草
 つゆ深し廢寺の墓や鬪體泣く
 しめやかに白萩に雨の日暮るゝ

雪

三丙 木村謙次

大雪や雪の下なる窓あかり
 雪中に幹太々と蘇鐵かな
 物を乞ふ乙女の聲や雪の門
 餌を求む鴉むれたり雪の畑
 雪蹴つて曉近し寒習ひ
 ○
 鶯を遠く聞きつゝ夢に入る
 粘り来る浪となりけり春の海

蝶の夢そよ吹く風に破れけり
 夏山に月煌々としりけり
 五月雨に濡れて猶飛ぶつばめかな

漢詩

乙五 膽岳 角田清八郎

賀某人入營
 旭旗翻處菊花香 義勇奉公思氣揚 私喜功成歸里日
 門前紅葉更添光

琵琶湖雜詩

晝畫橋頭秋水鮮 孤篷泊處月如煙 霜楓酷肖寒山寺
 數杵鐘聲落客船

訪服部擔風先生

水繞藍亭別作鄉 黃塵不到白雲長 先生主孝開春酒
 笑向尊親奉壽觴

庚申一月初三就擔風師勉學 超而六日歸鄉

此日九華城有蘭社大會 餘以事不赴焉 送
 擔風師干彌富驛而相別 九華餘興先生曾遊
 之地 時座上有畫墨之興後聯故及

野花香裡記曾游 蘭社諸賢無恙不 抱獨空懷九華郭
 阿誰重倚五層樓 解衣繫礪墨談湧 被酒淋漓詩思抽
 煙水江南今若昨 風光歷々在雙眸

彥根城懷古

孤鞍去踏落花塵 殘壘斜陽不見人 絕代英雄歸一夢
 城樓空護舊時春

秋日游山寺

山閣祇林夕 森然雲氣春 階空松子落 砌古木犀馨
 幽鳥來聞法 老猿仍弄蕊 諸天鐘已歇 片片印苔庭

輓蘆津石蓮禪師

古松百尺散清陰 勢靠蒼龍月下吟 物在人亡春寂寞
 一龕孤影佛燈深

訪大竹蔣逕翁不遇

松花石上落紛々 十二樓頭日又曛 道士出山猶未返
 洞門留鶴鎖仙雲

夏曉偶作

林間纖月落 山翠爭蟬娟 幽人伴鶴出 行過古寺前
 微聲猶未發 松門自寂然 獨有賣花女 藕花香滿肩
 蛾眉蟬鬢艷 纔是二八年 明眸稍俯視 含情嬌可憐
 笑日侵晨出 采之碧湖邊 花光迥露潔 葉色引翠妍

乃買三兩朶 欲與結淨緣 茲時僧啓局 導我坐法筵
 軍持井華滋 直插倍麗研 滿身花氣透 冷香足破禪
 出寺回湖岸 蓮葉即田田 靜中聞覆淹 娉婷媚清澗
 停杖神騁處 鳥下斷青煙 諦視羅襪影 忘形骨欲仙
 忽憶西湖曉 高誦洛神篇

七言古風一篇賦贈清水湯谷先生

永觀堂畔一草堂 古壁苔蝕薦蘿長 繞屋紅葉秋色麗
 便是先生寄栖場 先生嗜詩又愛酒 一醉吟誦何亮瀏
 往々風清月白時 路人聞之停行久 郊外脩然蹄轍稀
 米賈薪女唯款扉 室雖喬小足容膝 無復緇塵灑白衣
 殆似寒鷺不出谷 隱居青甍娛心目 每扶病婦愛情臻
 積善之家應多福 故人家隔數峰青 過鴈飛去入冥々
 忽思幽姿階庭立 苦吟聽琴酒未醒 陶公標格聖賢逐
 馬氏才名今古覆 噫微斯人興誰歸 且暮加餐須清穆
 我是天涯淪落朋 交於先生莫逆爾 開襟快談知何日
 好分青氍與青燈

寄劍持雪漁師

吳淞一別後 雲樹殆五春 酒悲與詩瘦 相憶空傷神
 天涯絕消息 日夜回望頻 憑欄心惻惻 或疑玉樓人
 落月照苔砌 惟悴白髮新 何料鴈傳信 知君在海濱

音書安且驚 却復淚沾巾 曾記程門雪 君心尤溫純
經義諄々譯 文質致彬彬 桃李下成蹊 由來德有隣
愧吾素孤陋 堂下猶劉輪 風流緣未了 徒做李杜羣
從是春浩蕩 烟波白鷗親 何日共剪燭 論文且酌醇

余與土居香國素不相知 適一昨秋八月寄詩以
乞斧正 有返書 賞嗟甚 嗣來入隨陽研鑽詩
文焉 其後契濶久之 仄聞花史高臥播洲鹽屋
村以養病焉 屈指辱交垂二裘葛矣 而未得接
聲咳 此人今也乃亡矣 噫悲哉 真有山陽笛
裡之感

天地留詩卷 文星忽滅光 溫敦傳六義 源委溯三唐
古道誰能嗣 正聲恐竟亡 焚香拜靈位 窓月易淒涼

迎楓峽先生入江村杏雨庵

蜂狂蝶痴夕陽喧 迎駕棠花香裡村 雨裡深簾剪銀燭
水鄉滋味對芳樽 幾枝風露迸爲玉 一道春江流到門
綰柳野橋人悵望 襟期重約送征轅

初夏偶成

傷心十日落花風 無復枝頭半點紅 乍聽一聲杜鵑叫
濛濛煙雨綠陰中

發火演習

一抹霜天牛斗垂 稜稜寒氣鴈聲寒 令嚴茄角三更月
誰和英雄橫槊詩

大震行

嗚呼大正十二年 九月一日午餉前 地軸俄翻覆
天柱倏轉旋 百萬人家瞬時僵 滿都火煙猛々揚
凄絕何知復慘絕 地獄眼前修羅場 况又四面風颶颶
加之兇徒乘紛淆 生靈忽失措身處 華麗帝京歸荒郊
樓閣倒矣豈足驚 哀哉萬鬼北邙迎 或傳一家空死滅
亦聞姊妹失弟兄 雙親已無孤兒存 兒女喪盡老父蹲
天涯覺々奈孤獨 寒衾抱影又抱魂 新紙爭報至我門
字々淚痕不忍言 優詔忽發舉國靜 至仁至慈有至尊
天之降茲殄 即知戒吾儕 上下荒怠無止處
積惡之極遂成仇 嗚呼恐懼奉戴明詔篇
如今廟堂皆聖賢 侍見誰學女禍手 急急煉石補漏天



通信



上海だより

東亞同文書院 三橋勝彦

親愛なる彦中健兒諸君、其の後の意氣や益々盛なる
ものがあるだらうと信じて喜ぶ。

あの美しい琵琶の湖東、金龜城下にはぐくまれて
雄然と建つ我等が搖籃の母校を燃ゆる希望を抱いて去
つたのは、もう三年前にもなる、大正十一年の四月か
らこの江南の學舎に遊ぶ事茲に一年有半、今日ついに
秃筆を訶して母校の諸君に對して貴重なる校友會誌を
借りて我が東亞同文書院及其寮生活を紹介する。

崑崙の嶺に源を發して中原九省を潤す長江は悠々五
千哩。その將に東支那海に注がんとする邊に一支流黃
浦江がある。江を溯る事數哩にして東洋一の貿易港グ
レト上海がある。上海の西郊徐家匯の地に超然
として中空に聳ゆる赤鍊瓦の建物これこそ我等が對支

經營の策源地東洋平和の淵藪たる東亞同文書院である
舊院長根津先生は既に二十餘年の昔に於て我對支政
策の根本義を洞察し、本校を創立し支那に關する政治
商務の須要學科を教授し今日に至つたものである。卒
業生を出すこと、實に一千五百有餘名、其の大部分は何
れも支那に於て重要な社會的地位を占め、我國對支
經營の先鋒として活動して居る。

學校の性質上文部省とは關係なく一般學校に對する
文部大臣の權限に屬するものは書院に對しては外務大
臣に屬する、學科は現在にては商業科のみで内地の高
商と同じく英語、法律、經濟、商業等に關する學科の
外に特に、支那に關する科目即ち支那語、支那時文、
尺牘、漢文、支那地理、支那制度律令、支那政治事情
支那經濟事情、支那商業慣習、支那通商史等の學科で
ある。支那語は書院の卒業生に問へば何でも解る。學
制は四年制になつた。學生は府縣費生、外務省留學生
滿鉄派遣生、私費生の四種がある。僕等は準縣費生だ
が滋賀縣からも縣費生でござし派遣して呉れる様に
縣廳へ交渉してゐる。目下在學生四百餘名、中華學生
八十名程である。學費は一ヶ月五十五圓だが、私費生

準縣費生の他は派遣個所より直接學校へ納めて呉れるそれで學校は學生の衣食住一切を支辨し、學用品、旅行用品は勿論一週間銀弗宛の小遣を呉れる。それ以上に自分で使ふ金は別に親からもらうのだが普通十圓もあれば充分だ。學校の説明はこれ位にして次は我々の日身体験しつつある寮生活に及ぼう。

學生は全部寮生活で南寮、北寮、西寮何れも洋館、階下は自習室、階上は寢室になつてゐる、自習室は椅子、寢室は寢臺で疊なんて不細工なものはない。朝は六時に支那人ボーイが起床の鐘を鳴らす。七時には朝食の銅羅ががらがら鳴り渡る、之で起る奴はまだ早い方で大部分はまだ暖い毛布の中で故國の夢でも見てゐる。それでも八時迄には起きて朝食を食ふと始業の鐘が鳴る、中には寢坊して顔も洗はずにノートとペンを引つかんで教室へ走る奴も無いでもない。

授業は六時間、放課後は武を練る、奴散歩する奴、ボールを投げる奴、一週間は後れたリ付の新奴を餘念なく見る男、寢臺にもぐり込んで樓上哲學に夢中になる男、千態萬種だ。

食事は全部支那料理、來た當分は一寸面食ふ。

夕食後は大低散歩する、大陸の夕陽が彼方の地平線上に沈まうとする時、丘に立つて寮歌を口づさびながら遠くこれを望み見る吾人遊子の胸に、又一種の感慨なきを得ない。あの太陽は遠く青海の沙漠を照すだらう。西藏の高原にも入るだらう。我愛する四億の民は五千年來纏綿としてこの美しい詩の國に雄大なる山川と頽廢の歴史を持つて、依然として桃源の夢を貪つて居る。曹昆は大總統の職についた、だが南北は今に統一しない、されどそれは彼等人民にとつて何であるか、我老大國の山川と其の民草は泰西文明が齎す榮光と慘劇を知らずして、依然として無限の富源に抱擁せられて、詩趣を帯びた原始的の生活に安じて居るのではあるまいか。江南の楊柳青を發し、龍華の桃梢紅を呈する頃、志を禹域に抱き、日支親善の先驅者たらんと自覺せる紅顏の若人一百有餘は、二週間の日本内地旅行を経て、故山を後に、玄海の波濤を突破し上海碼頭に勇姿をあらはす、上級生の歡迎をうける。見上げるばかりの大ビルデングの建ち並ぶアスファルトの道路菩提樹の美しい並木の佛租界に自動車飛ばして日章旗ひらめく書院の正門に入る、一寸感慨に打たれざ

るを得ない。何を見ても珍しいものばかりだ、先輩の案内で上海中を引つ張り廻はされる。無暗に多い自動車疾風の如く側を絶えまなく通る、電車が来る、馬車が来る頭が混亂する、苦力車夫に怒鳴られる、實際氣が氣でない。十字街には容貌怪異の印度巡查が棒を持つて、交通の整理をして居る。廣いローソンの公園を散歩するあらゆる國の人々に遇ふ。現今上海には二十四ヶ國の人が雜居してゐる、實際コスモポリタンな氣分になる。

やはり大陸に住めば人間が大きくなる。我々は此世界的大都市に在つて母國の専門學校の學生が馬鹿騒ぎをしたり、女學校をどりまいたりして居る時にも、孜孜として我日支兩國永遠幸福の爲に對支經營の先鋒たるべく精神の練磨に餘念がないのだ。

上海の春はよい。街路樹の枝は萌黄色の柔かい夢の様な色に芽ぐむ。公園の芝生は日曜毎に青くなつて來る。春雨降る寮の窓から眺むれば青柳の絲が李桃の白紅と相映して、江水日に温み行く。端艇部歌の一節に

天下の民の糧實る 宏野千里を貫きて

流れもあへぬ大江に 春のたる日を舟やれば

風に文ある龍華の 桃紅の花吹雪

此の國に珍らしい櫻の花が書院の庭に母國の精華を現すのも此の春である。

小麦と菜種の收穫が済んで綿が蒔かれる時、潑刺たる青年を彷彿する夏が来る。六月の初には四年生が支那内地大旅行に出發する。大旅行は書院の花、吾々の誇りなのだ。班を分つ二十有餘、五六名一團となり、日を費す實に百數十日、支那四百餘州殆んど我書院大旅行隊の足跡を止めない所はない。或る者は白雲湧く南海の邊、粵桂の地を極め、椰子の實みのる西貢の炎熱と戦ひ、或は砂風渦巻く天山の北、長城を突破し、蒙古の古廟に羊群と一夜を明し、又或者は蜀の棧道を越へ峨眉山上明月を仰いで亂世を慨き、或は長安城下玉笛を聞きて古人を偲び、西湖の畫舫洞庭の夜雨、星まばらなる夜胡弓の哀音に中華の現狀を慮ひ潸然として征衣の袖を絞つた者もあらう。實に我書院の内地調査大旅行の體驗は眞に支那を理解せしむるに充分だらう。

大旅行送迎歌に

嵐吹け吹け抹靄嵐

雪の蒙古に日が暮るゝ、
征鞍照す月影に

仰げば空に雁の聲。

夏休暇は六月下旬より七十日、歸國するものもあれば又勝手に旅行する者もある。秋風がそろ／＼吹き出す九月には皆眞黒になつて江南學舎を忘れずに歸つて來る。

異國の秋は又格別の趣がある。ことに夜になると、江南のシーンは全く一變する。眞如の月、一點の雲もなく山一つない原野を白く照す、百草の花の露千草にすだく蟲の聲。どんな武骨一點張な男でも異郷に此の溢るゝばかりの詩的材料をもたられずには心靜かに赴く秋の悲哀を泌々と感ぜずには居られないだらう。江南の沃野を照す月は底知れぬ深い沈黙を以て凄く冴え渡る。こんな夜は點々散在する墓場の土饅頭の上で落花生を肴に老酒を酌んで馬賊の歌を高吟するのだ、この氣分は吾人書院健兒にして始めて分る事だらう。

菩提樹やアカシヤの葉が黄ばんで淡い哀愁と追想とが其陰にまつはる十月の中頃には一學期も終つて筆記が山の様にたまる。猛烈な試験勉強が初まる、日頃吞

氣な男も顔色なしだ、この學生もやはり試験勉強だけは他に負けない積りらしい。學期試験の終つた夜などは寮廻りてふとても亂暴な事がある。大酒を吞んで終夜寮内を暴れ廻る。窓硝子の破れる音、本箱のひっくり返る響、椅子は飛ぶノートやペン、インクは中空に舞ふ、眞に人生の規範を脱した一日なのだが今では嚴禁されてしまつた。

書院の正月はまた面白い。があまり長なるから止そう、勿論誰でも一升や二升の屠蘇は祝ふのだが。

春には桃花散る江岸にボートレースが開かれる、すると俺の腕が躍り出して役に立つ。秋は陸上大運動會共に上海居留邦人の期待する年中行事の一つだ。

支那の世界的地位及其状態は實に我日本に影響する事甚大で吾人の研究を要することは今更ら云ふまでもないことだが就中經濟及び軍事上は絶體に支那を離るべからざる關係にあるを思ふ吾人は近頃月並文句になつた日支親善と云ふ事を單に口頭禪たらしめざるように特に努力せねばならぬ事を茲に云はんと欲するものである。

歐洲大戰後列國の眼は等しく東洋に注がれ華府會議

國際漕艇俱樂部主催端艇大會を見て

(一浪人)

私は朝十時頃でした天津驛で汽車を下りて大會のある石場とか言ふ所へ行きました。驛からは割合に遠い様に思はれました。丁度私が會場に着きました時に、あの米子中學と何所かの中學とが競争する所でした。石崖の上に立つて群集と共に艇の進む湖の表を眺めて居ました。

段々近づいて来る三艇は舳に小波を割つてすべつて來ます。一漕毎に心身の力を注集して漕いで居る様子は本當に何とも言へない程男らしいものでした、七百米位も進んで來た時分一艇が急に歩を速め出しました一漕毎にぐん／＼抜いて行く様、頭を振つて頑張る様子は實際見事なものでした。二艇をはるか後方にして決勝線に入りました。此れは米子中學第一選手でした間も無く上つて來ました。その顔色や動作は全く苦痛と云ふものが無い様に見えました。彼等は戦勝の嬉びに一層の元氣を増して競漕の苦痛を忘れたのでせう。而もその體格の立派な事は驚くべき位です。五尺七八

今や國家愈々多事ならんとするの秋、益々諸君の御自重あらん事を遠く浪の此方より祈つて擲筆する。

以來の支那に於ける列國の競争は益々激烈ならんとする此時に當り我敬愛なる彦中健兒諸君が將來對支問題に注目し帝國進展の爲に且東洋永遠の平和の爲に自ら進んでその保持者たられん事を希望する次第である。目下滋賀縣人で書院在學者は九人でその中彦中出身者は大正九年卒業の秋口君と拾年卒業の私と八年出の森居君十一年出の木下君の四人を占めてゐる、日本帝國が有する唯一の専門學校たる東亞同文書院に我彦中の健兒が奮然として來り投じ曠漠の原に國際的活躍の第一步を占め雄大なる抱負の爲に心血を捧げられん事を切望して止まない。

漠然たる事を長々と書き連ねたが、之によつて書院生活のアウトラインだけでも知つて呉れたならば私の幸とする所だ、尙吾人と志を同じくし、海外に雄飛して支那大陸に男性的舞臺を得んとする健兒諸君には、充分の回答を致す積りで居る。

寸もあるかと思はれる堂々たる體、日に焼けた赤銅色の腕には計り知る事が出来ない程の力がある様に思はれました。

焼き付ける様な日は湖の面に反射してきら／＼光つて居ます。判定船の汽笛が一層むし暑い様な氣持をさせます。そこらこゝらでアイスクリームなどを賣る聲が盛に聞えます。

七回目だとか云ふ事でした。私等の前をH、M、Sと黒字で表したユニフォームに漕の字を染め出した鉢巻をしてオール軽く禮をして通る艇を見ました。

私は大津に着く前に汽車の中で、六尺豊かな大男が赤黒い筋金の入った様な腕をして、H、M、S、のユニフォームにつゝんだ姿を考へて居ました、然し今眼前に見た人々は幾分違つて居るのを知りました、日に焼けた、眞黒に引締つた腕や、眉間に表れたる何者とも組まん意氣は變りませんが未だ若い年の柔かさは感じない譯にはゆきませんでした。

その仕合は東北中學、和歌山中學と母校でした。戦は開かれました、白煙の一發と同時に三艇はきら／＼光る湖面をすべつて進みます。不安の眼に幾度か母校

の武運を祈りつゝ私はそれを眺めて居ました。然し近寄るにつれて刻々悲しみが加はるばかりでした。

東北は堂々先頭を切つて進んで行きます、和歌山と母校とは一進一退の位置で迫つて行くのでした。間もなく東北は決勝線に入りました。一發の煙は高く上ると同時に和歌山はオールを流して了ひました。長い一學期、暑い思、辛い思をへてやうやく來た今日、口惜しい殘敗を思ふと彼等は全く漕き續ける力も盡きたのでせう、然し母校の選手は止みませんでした。和歌山を抜いて一漕一漕ラストヘビーを見事に見せて決勝線に倒れ込みました。

諸君！ 母校の選手は實に立派でした。我が選手には勝敗の念よりも、もつと美しい、もつと氣高い心を持つて居たのでした、それは「正しく最後まで」と云ふのでした。母校の選手が大津に着いてから、はるか彦根の空を望む時、苦しい艇上の人となつてオールを握る時、何時も彼等選手の心に宿つて忘れられなかつたのは母校五百の健兒に送られた門出の歌でしたらう彼等の胸に焼き付いて離れなかつたものは「我れは彦中の選手なり」と云ふ事でしたらう。

不幸にも戦は敗れました。然し決して母校の選手は大死ではありませんでした。立派なる討死でした。

丁度私が見て居た傍に四高の選手が見て居ました、母校の選手が和歌山中學のそれに反して最後までよく奮闘したのを見て「矢ッ張り彦根だなあ。」こんな事を言つて居ました。獨り私等のみならず此大會を見に來た人々は皆母校選手の美しい態度を稱へてゐる事です。

承りますと本當に選手諸君は若い方ばかりださうでした。たとへ今年度は敗運に歸したとてその美しい心の下に來る年益々奮闘して下さらんことを祈ります。

戦のその場に臨んで、たゞさへ不安なる選手に責任を説く事は實際無情な事です。選手はどの選手でも、「我れは彦中の選手なり」と云ふ信念の下に務めて居られます。

母校を愛する心、犠牲的の心は選手の胸に燃えて居ます。未だ寒い四月の始めから石をも溶かさむ程の炎熱の夏まで艇尾に翻す旗の示す赤き心に、選手諸君は専ら母校のために務めて居ます。然るにこれを知る人はありません、沖の鷗が見返るばかりです。

先輩諸兄の内には應援團等を作つて來年の必勝を期して居られるとか云ふ事を聞きました。諸君益々熱誠に應援せられます様祈ります。

私は此の夏まで餘りボートの事は知りませんでしたが大會の日三橋君や諸先輩から色々承りまして、選手諸君が務められた努力が敗北の名の下に消え去らむ事を恐れ拙筆を顧みず此の記を書いた次第です。

さらば諸君、來る年度諸君と共に母校の必勝を祈つて筆を擱きます。





部
報

學藝部報
(大正十一年度)

大正十二年二月十一日紀元節の佳辰を卜して學藝品展覽會を開いた、うづ高く集つた、成績品這回は特に多種多樣で有つたが、矢張圖畫、習字が最も多かつた杉江、丹波兩先生の審査を請ひ等級をつける受賞者左の通り。

圖
畫

- | | | | | |
|----|----|-----|-----|------|
| 優等 | 田附 | 利八 | 上野 | 中 |
| 一等 | 木村 | 平次郎 | 青山 | 庄次郎 |
| 二等 | 田中 | 宇一郎 | 中田 | 三郎 |
| 三等 | 田中 | 武三郎 | 奥居 | 俊一郎 |
| | 天方 | 健一 | 樺詰 | 興惣次郎 |
| | 後藤 | 彌一郎 | 鈴木 | 信之介 |
| | 大崎 | 彌太郎 | 長谷川 | 守二 |
| | 北村 | 吉藏 | 内藤 | 信夫 |
| | | | 藤野 | 郁三郎 |
| | | | 松宮 | 誠一 |
| | | | 村上 | 正和 |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|-------|-------|------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|-------|
| 四等 | 井上保太郎 | 羽根田廣造 | 吉岡 光三 | 田中 潔 | 習 字 | 優等 | 千菊直太郎 | 一等 | 角田清八郎 | 二等 | 三和 康三 | 吉田清一郎 | 井上 昇 | 柳吉 武雄 | 上坊十右衛門 | 郡田 謙三 | 羽根田廣造 | 澤 効一 | 天谷 靜界 | 小富士嚴夫 | 田中 三郎 | 竹中康次郎 | 四等 | 名畑 榮一 |
| | 佐藤 見三 | 長崎 孝次 | | | | 竹中 賢次 | 西澤久一郎 | 川崎 一郎 | 原田 富藏 | 青木 正雄 | 池田 誠助 | 竹腰 義雄 | 長崎 孝次 | 桂卷 喜一 | 平野 等 | 木村 六郎 | 北川 良一 | 山本 捨三 | 那須 行英 | 楠 好雄 | | | | |
| | 上林 忠雄 | 野村 末藏 | | | | 宇治原信三 | 山岡敏太郎 | 藤谷 善雄 | 上田久次郎 | 岡部敬次郎 | 伊藤甚次郎 | 赤田 盛夫 | 田邊 林造 | 太平太一郎 | 寺村 秀雄 | 藤居 直一 | 藤本 元博 | 藤野 豊 | | | | | | |

- | | | |
|-----------|--------|--------|
| 北村 又藏 | 藤關 義雄 | 佐藤 寛 |
| 長谷部 專三 | 三原 文雄 | 須山 清太郎 |
| 木下 仁兵衛 | 田中 良三 | 北村 光三 |
| 伊吹 俊雄 | 小林 英太郎 | 脇 元三 |
| 和 歌 | | |
| 四等 田中 宇一郎 | 新 體 詩 | |
| 三等 上野 中 | 俳 句 | |
| 四等 田中 宇一郎 | 渡邊 泰興 | |
| 二等 長崎 孝次 | | |
| 四等 寺村 新太郎 | | |
| 英 習 字 | | |
| 二等 中川 治郎吉 | | |
| 四等 小川 千代丸 | | |
| 物 理 | | |
| 二等 森 藤吉 | | |
| 博 物 | | |
| 二等 内藤 信夫 | | |
| 歷 史 | | |
| 通 信 | | |

- 四等 名畑 榮一
地 理
四等 藤本 吉一 名畑 榮一

(大正十二年度)

部長

山本教諭

理事 大崎彌太郎

野瀬光三

鹿谷義雄

堀川辰之助

内藤信之夫

原

序

本年も亦山本先生を部長と仰ぎ、我々五名微力を盡す事となれり。予等謂ふ、辯論そのものは其人の文事を現すと。故に我が部の隆盛は我が校の文事の隆盛を語るもの。我等理事は赤心以て、我が部の爲に奮闘せんとす。

本年度第一回學藝大會

六月廿四日短縮授業第一時間後、本年度第一回學藝大會を開催す。本年度より理事活動の方針を採り、開

會閉會の辭も理事の行ふ事とせり。

一、開會の辭

理事 大崎彌太郎

破れんばかりの拍手を浴びて登壇。今年度の方針を述べ、聴衆の理解を促すと叫んで、本會の幕を切つて落す。

二、膽力の養成

二丙 正田 芳夫

身體は皆膽とは如何なる人か、曰く「ネルソン、徳川光國、大倉左衛門……」等と幾多の偉人の名を擧げて、聴衆の奮起を促す。

三、生の眞實

三甲 楠 好夫

人は生きんとする欲あり。人生は其の意志の連鎖なりと説破す。人生の二大不解事なる厭世觀、享樂觀を信仰によりて解結せんとす。願くば法に眞實なれと。

四、初夏の黎明へ

四甲 若林展次郎

平和は遠遠か？ 今世界は行詰れり。見よ!! 新獨逸を。彼等は遠大なる理想を抱き、新運命を開拓しつゝ、

ある。又芽ざしつゝある。人は清き理想あればこそ進歩あるものなりと。本會指折りの辯士なり將來の發展を祈る。

五、重要視せらるゝ獨逸製品の復活

五甲 藤井源三郎

今や獨逸品は世界の市場を非常なる勢を以つて壓倒せり。あゝ恐るべきかな獨逸と。同感の聲頗る高し。

六、樂 地

二甲 麻生 龜吉

樂して樂を得る現代を詰り苦しみて後樂が來ると。七、青年と壯年

三甲 大谷 義雄

世界の青年と、我が國の青年とを比して、我が遜色の著しきを説き、現代青年は國家を理解せずと。青年須らく全國家を負ひて立て。

八、體力の養成

四乙 羽根田廣造

現代青年は、諸外國の青年と比して、體育上大いに劣れりと。體力の養成法を述べ。

九、レシテイション

五甲 正野敏二郎

題目は『新陳代謝』と云ふ。今まで少し喧噪なりし聴衆は静まりしも、殆ど誰も解せず。唯メロディを聞くのみ、『もう少しゆつくり』とは先生の評なり。

十、利 の 説

二乙 須山清太郎

軍人も學者も教育家も僧侶も、あらゆる、階級を通じて、皆利の爲に働くのである。人間胴體を敲けば、『利々』と響くと。音響頗るよく聴衆目を醒す。

十一、眠むたいでせうが聞いて下さい

三乙 松宮 誠一

理事が演題の紙をまくるや、早合點をして『聞いてやる、聞いてやる。』の聲高し。世界の列國は皆疑の眼を以つて我が國を見る。平和平和の聲は高いが世界は眞に平和ならずと。

十二、僕等の求むる新宗教の一面

四丙 鹿谷 義雄

余は藝術中心の新宗教を求むと。頗る良好本會花形辯士なり。

十三、運命の開拓

五丙 北村 省三

提出せられし題は右の如くなるも『野心』と變ず。野心とは大望なり。大希望なき國民は、國家は、砂上に築ける家屋の如しと、危き哉。

十四、ハーモニカ獨奏

三乙 近藤 文雄

演者欠席の爲め取止。

十五、食物の修養

二乙 竹腰 義定

巧に例を擧げて、辯説流るゝが如し。有望々々。

十六、修養と工夫

三乙 竹中康次郎

竹腰の後を受けて恥かしからず巧に説けり。

十七、我等の夢は破れたり

四甲 青山 正郎

黒船に夢を破られし我が國は、其儘再び夢に入り、そして又夢を破らるゝ、時來れりと獅子吼す。少し長きに過ぎ聴衆の倦みしは遺憾とす。

十八、迷 信

四甲 堀川辰之助

迷信と信仰との距離近しと云ふ。迷信なければ世は疑を以つて覆はれて暗黒ならん。

十九、國家多難の時英傑大老井伊直弼公を想ふ

五乙 筒井 清彦

尊王攘夷の論盛なるとき日本を負うて、開港したるは井伊大老なり。大老の眼は我等が行動を凝視せり。我等悠々手を束ねば、何の面目ありて地下の公に見えんとすやと。蓋し本會第一人者なり。

二十、死線を越えて

五丙 野瀬 光三

題が奇抜なるので、聴衆睡を吞んで待つ。人間萬事死線を越えて爲し得ざるなしと。當日氏は咽喉を害し發音不明なりしは残念なりき。

二十一、閉會の辭

理事 野瀬 光三

會後約一時松浦三郎氏の講談ありて後會議室に出演者會合を開き、審査諸先生の批評を煩し後意見を交換す。終へて茶話會に移る。校長先生の臨席下されし事を光榮とす。終りに臨んで本會に對する、感想の一端を述べん。

一、辯論の内容が國際的問題に重きを置き、我が國家の世界的地位、世界の形勢の影響等に論及せることの多きは現代の青年が對外關係に興味を持てる事を知るに足る。國家の爲に大いに喜ぶべき事に屬す。

二、聴衆者の態度猶未だ理想に遠きは辯論に對する理解の缺乏するに基因するならんも一時は上級生の演説が下級生に徹底せず、又下級生の話が上級生に聞くに倦ましむる事も亦た一大原因なるべし。故に上級下級個々別々に會を開く事の必要なる所以を知るべし。

本年度第二回學藝大會

未曾有の大震災に遭遇して、東亞の華と誇つた東都は轉旋にして壊滅し、誤つた文化は復興にして漸盡して、唯殘れる焼野原は、科學の殘骸に荒蕪せる人心を載せて、餘震を續けてゐたが、句ならずして復興再健の勇氣勃然として起つて、彼方に荒蕪した人心緩和の爲、音樂會開かれ、此方に疲弊羸蹙せる罹災者の爲に、ペイジエントが演ぜられてゐる。

此の意味に於いて、十月二十日午前九時より、我が校堂に於いて開かれた辯論大會は、急激な刺激に興奮

した思想を、鎮靜する使命を有し、又亂散せる思想の統一善導の爲に催されたとも云ひ得ると思ふ。

油は油を以つて洗はなければ駄目である。我等の思想は現實の一步先を不斷の變遷を續けながら進歩の流れを辿つてゐる。而して此の思想善導は亦思想其物であらねばならない。而して其の思想が、辯論によつて最も力強く表現されるのである。

諸君此の意味をよく考へるとき、一校の辯論會と雖も、一人の演説と雖も忽せにすべきものではない。

一、開會の辭

理事 野瀬 光三

凜然として溢るゝ拍手の内に演壇に立ち、場内靜寂になるを待ちて唇を開き、地球の廻轉日月の流れより説き起し、斯くの如き貴重なる時間と時間との間に開催せられた、辯論大會を有意義に終らんが爲には聴衆の謹聴と熱ある應援とを要すと。

二、零碎の時間を利用せよ

二丙 正田 芳夫

壇上立派な態度にて、「多くの時間があつても、此れを利用する者が少く」と説き學生にて豫習復習の時

間なしと云ふ理由なしと皮肉る。

三、國家は青年に何を要求しつゝあるか

三甲 吉田 諦誠

我が大和民族はパツシブの民族であり。維新以來六十年間の努力は、西歐文明を如何に模倣すべきかであつた。然し此れからの我等は宜しく受動的態度を捨て、能動的態度に進まなければならない。「凡ての物が進み行く内に一つでも進歩しないものがあるならば、畢竟それは亡びざるを得ない」と。

四、美しくしき涙

一甲 東 清哲

辯士に適はしい題材であつた。天真な君にして、無邪氣な東君にして、初めて叫び得るのである。「美しくしきものは涙なり」と、燦然たる寶石よりも甘き砂糖よりも、唯々カールルの心より滲み出た一滴の涙が、より以上美しくしき聖い光を放散してゐる。騒がしい聴衆も此の涙に動かさる。

五、生死の境に立ちて

三丙 北川與太郎

九月一日俄然起つた、自然の破調、大地の逆轉、關

東に投げ落された大警棍の下に焦熱地獄に轉々とする幾萬の死屍の間を潜り、餓鬼道に蹣跚行進し猛煙、紅蓮の如き焰の彼方に死の灰色を凝視しながら、辛うじて猛火の巷を避け龜裂の危地を踏破された君が、溢るゝ感激の下に、慘憺たる大事實と、酸鼻なる大實在と惻愷すべき大真相とを傳へ人間としての體驗より得たる、金玉の教訓を叫ばんと壇上に立たれた。凡ての聴衆は演題の異彩に大なる期待を抱合してゐる。

靜かに噤まれた口が綻ぶや力の籠つた三寸の舌の振ひは、言語に絶したあの慘虐苛諫を眼のあたりに描かしめ、燃ゆる熱情は赤熱された言詞となつて、聴衆の胸を打つ。そうして最後に「自分は生死の境に彷徨して人力の大なるを知り、人はどの様なごん底にあつても、自分の道、生への道は展べ得ると思つた。」と條理整へども措辭の洗煉稍々缺くる點あり。加之初めより熱し過ぎて早口になりたるを遺憾とす。

六、此の世にあらん限り、力の續く限り

二乙 栗田 春夫

人は働く義務あり故に遊んで食ふ者は大なる料見違なりと。

七、The thief caught.

二甲 三和 普

先づ無難、よく解りました。

八、志を立てるには先づ目的を立てよ

三甲 大谷 義雄

人生が捨小舟の如きものならば、如何に頼なきものなるかと先づ叫び、目的あつて始めて人間生活が出来る成功は目的の遂行なりと定議す。抑揚や、不足なるも立派な演説であつた。

九、大正小邪

四甲 岩崎由太郎

取止め。

十、大坊主小坊主

一乙 南條 六郎

面白い話であつた。

十一、一字千金

二乙 須山清太郎

萬巻の書を涉獵し多作多思する事が大家となる秘訣であるが、又一つに一字一句の推敲も重大なりと。美しくしき聲、落着いた態度を讃美せずには居られない。

十二、自治の精神

五甲 北村 省三

自治の必要尊きを説く、落着きすぎて聴衆に乗せられたる感あり。

十三、地震の支那に及ぼせる影響

五甲 藤井源三郎

急激の如き拍手に送られて演壇に登り、氣轉の利いた挨拶に火蓋を切り、學生的な元氣と力の籠つた口調で、震災によつて支那は日本を理解し、日本が東亞に存在する故に東亞の平和が保ち得る事を知つた。

十四、人間の價值

三乙 那須 行英

巧なるジュエチャーと轉ぶ様な口調とで、古裸の例を引用して、通俗的に人間の價值は内面にある事を説く。流石に騒がしかつた聴衆も思はず釣込まれる。

十五、リーデング

五丙 鈴木 周二

稍々低音なりし感があつたが、熟達した發音にてラインを流れる様に辿つて行く。場内靜寥

十六、生活の悲慘

四丙 鹿谷 義雄

現代生活は戦争より以上に悲慘であると叫び、此の

度の災害によつて我等は我等の生活を反省する機會を與へられたと云ひ、最後に「燃ゆる人間愛と、美しくい相互扶助の心を持して、眞實な歡喜に充ちた生活をし、ヘラスの文明も、ガリヤの文明も捨て、第三帝國神人合致、靈肉一致の泰明へと進まなければならぬ」と。

十七、成巧とはこれ如何

二乙 竹腰 義定

我が校辯論部の明星の一人、疲れ切つた、聴衆を練達せる辯論を以つて、巧に練り、然も適當な抑揚と充實せる内容を以つて恍惚たらしむ。益々此の道に精進あらん事を祈る。

十八、對話(英語)

五年 正野外數名

十九、イングリッシュユスビーチ

古市 先生

二十、自殺は無言の雄辯

三乙 松宮 誠一

詩的な題の下に徹底せる論旨を美聲、朗音を以つて踏々と進める。

二十一、思想界の戰國時代

四甲 若林展次郎

現代の思想界は、混沌として宛然戰國時代の様であ

る。甘粕事件は時代の産物である云ひ、道德の腐敗墮落を詰りて有島武郎、其他數多の例を上げて示す。然も飽迄靜かに沈着に、柔婉に論を進め、さながら秋風に坐するが如し。

二十二、理想と實際 膳所中學校 佐治 君

二十三、人間苦と愛 同 伊香 豊一君

二十四、鞭打つ者 彦根高商 田中 乙作君

二十五、自然の人間に對する復讐 滋賀師範 武藤寛一郎君

二十六、非平等自由 四甲 堀川辰之助

登壇するや、先づ愛嬌溢ふる、眼を以つて満場を俯瞰し、聴衆靜まるや、三寸の舌を自由自在に振ひ、時代思想の潮流を溯行し、片言に鋭鋒を含め、隻句に白刃を潜ませ、平等自由の説を覆入して行く。

二十七、小なる犠牲 五甲 正野敏二郎

「稼ぐに追附く貧乏なし」とは過去の眞理にして、現代には役立たない。現代は「働かざるものにパンなし」が經濟的に共存してゐる社會の標語である。そう

して矛盾を取り去り人生を清淨化せよ。

二十八、心底の弦に觸れて 五乙 角田清一郎

獅子の子と羊の例を初めとして、色々の例を擧げて地上の一砂すら眞理の表れである。吾等は眞理を認よと叫ぶ、心底の弦に觸れて流れ出づメロデーは、美くしい詩を含んで、リズムミカルな音波となり、又聴衆の心底に消えて行く。

二十九、白 熱 五丙 野瀬 光三

先づ冒頭に於いて「吾人は沸騰點だらずんば冷水點たれ」と叫び、キリストを揚げ、ノクラテスを賞揚し日蓮を説き、マルチンルーテルを膾炙せり。白熱白熱辯士其者が白熱の如く、演壇を蹴り、手を翳して灼熱の語を發し、最後に「正義の所有者は白熱の人、白熱の人は大なるエネルギーの所有者である」と絶叫して降壇。

三十、閉會の辭 理事 堀川辰之助

終了後審査員諸先生の批評會ありて散會せり。

武 術 部

◇柔 道

七月二十五日於武徳殿

第二十四回青年大演武會之記

岡山苦田津武會	結城 文彦
徳島中學校	筒井 清彦
徳島商業學校	元木 次郎
今治中學校	渡邊 泰興
八女中學校	毛利 勝四郎
	野瀬 光三
	中村 英一
	西村 清二

十月二十一日於水口中學校

第八回縣下中等學校武術大會之記

第一回 戰	本校 野瀬 光三	本校 渡邊 泰興
	膳中 藤村 智明	膳中 熊谷 平和
	膳中 鹿谷 義雄	膳中 西村 英一
	膳中 古川 敏夫	膳中 淺田 一夫
第二回 戰	本校 岩泉 武清	
	膳中 村松	
本校 野瀬 光三	本校 加藤 忠太郎	本校 渡邊 泰興
本校 鹿谷 義雄	本校 松川 弘毅	本校 奥村 作太郎
本校 岩泉 太郎	本校 井狩 太郎	本校 西村 英一
第三回 戰	本校 野瀬 光三	本校 渡邊 泰興
	膳中 清水 又己	膳中 杉本 正治
	膳中 伊藤 清三郎	膳中 芥川 研吉

本校 岩泉 滿助
水中 加藤 清

第四回戰

本校 野瀬 光三
本校 小椋 榮太郎

本校 鹿谷 義雄
本校 横山 光二

本校 岩泉 清
本校 上野 秋季知

本校 渡邊 泰興
本校 武藤 寛一郎
本校 西村 英一郎
本校 辻 俊夫

第二十四回 日本武德會 青年演武大會

大正十二年七月二十七日午前八時ヨリ開會

本校 峽北 校中

本校 姫路 校中

本校 甲府 校中

本校 富山 校中

本校 德山 校中

宮村 又七貢

山本 陳峰 雄

高野 邊 富三

辻 慶太郎

西澤 久二 郎

高野 瀨

川添

西澤

種村

山本

北川

小藤

加藤

初丹

御幸記念武術大會

警校

工業校

長濃校

本長校

部報

安原 北村
辻野 高瀬
矢野 西澤
松木 村

畫田 今川 堀田 岡田 彦根 辻 高野 瀨 川添 西澤 種村

本校 坂出 中校
平川 添桂 久藏

十月二十一日 滋賀縣教育會 武術大會之記

辻 彦中

高野 瀨

川添

西澤

種村

南

植野

文田

新藤 橋

辻 彦根中

本校 長校濃 川上 添川

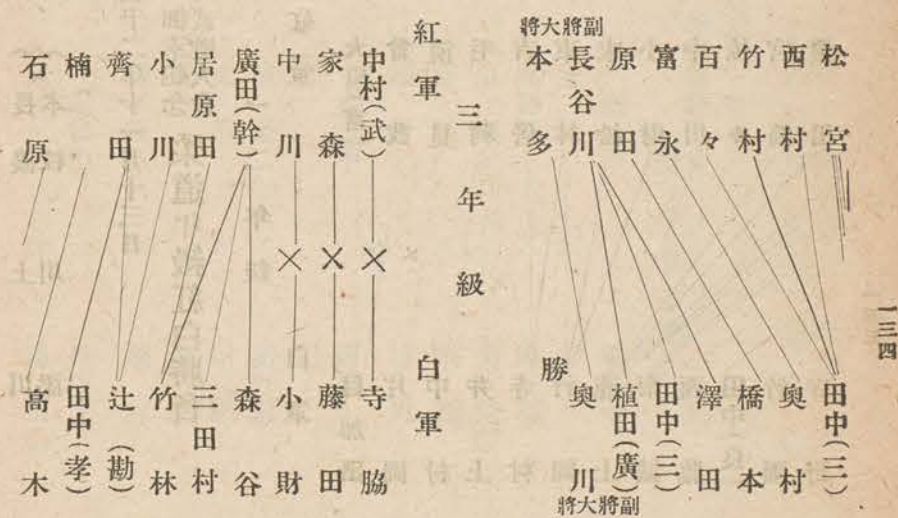
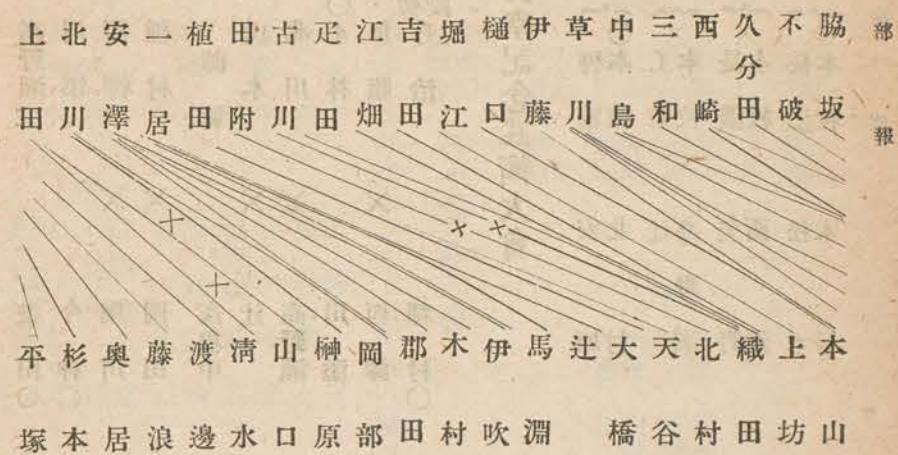
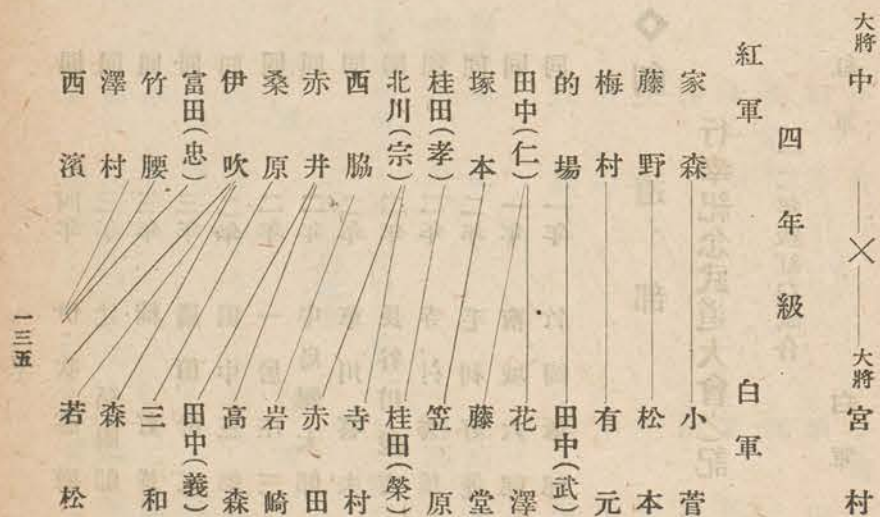
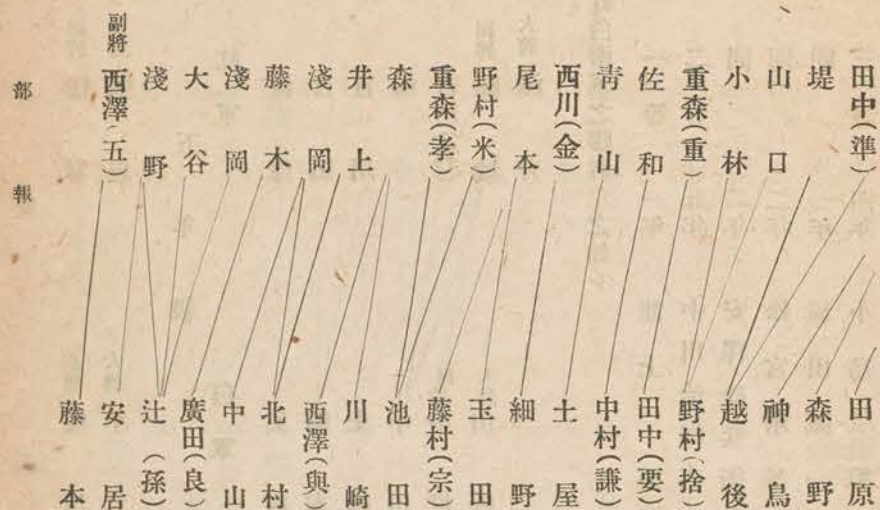
大正十二年十一月十三日

御幸記念 柔道年級紅白勝負

紅軍 一二年級

白軍

大橋(富) 我 見 利 居 林 松 財 川 々 崎 田 栗 宮 佐 中 小 末 東 吉 毛 漠 曾 大橋(富) 目加田 片岡 中村 井上 寺岡 竹上 龍岡 南脇 西脇 田中(良) 竹園 守野



一三七

近藤（見）

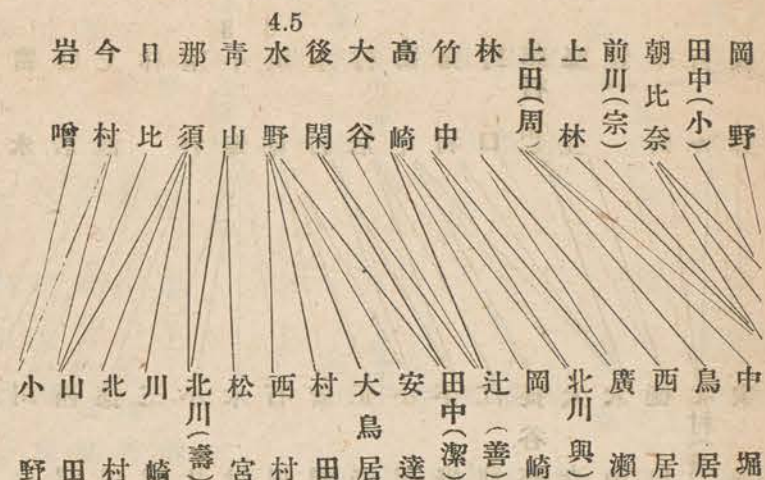
紅軍

行幸紀念武道大會之記

一二年級紅白試合

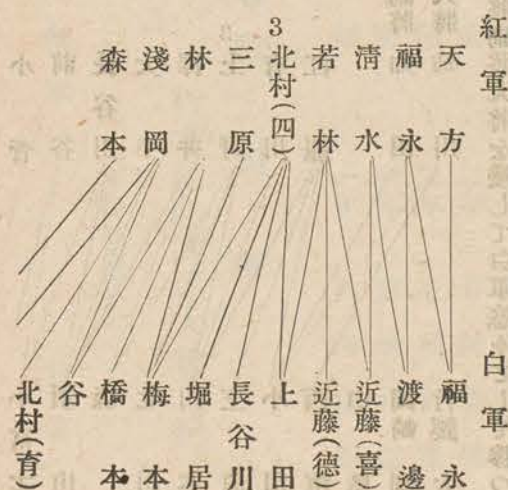
白軍

[illegible]



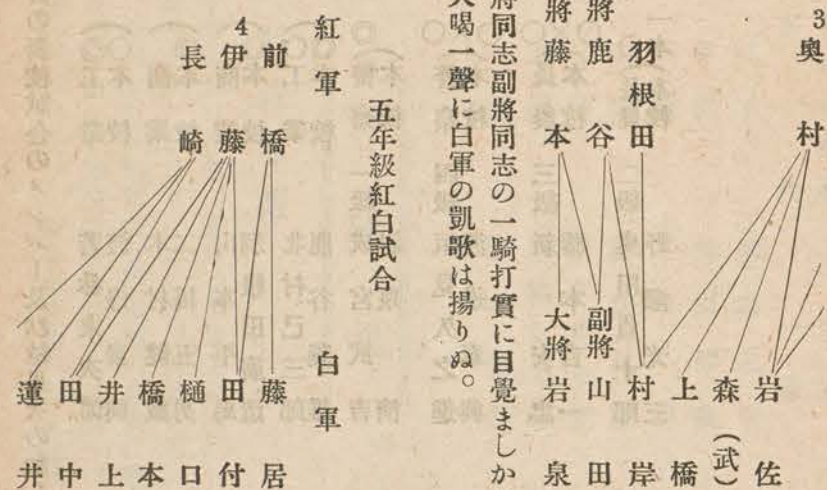
◎ 副將 伊藤 藤
大將 二橋 大將 宮田
大將同志の一騎打となるや二橋得意のお胴ッ一本に紅軍の勝。

四年級紅白試合

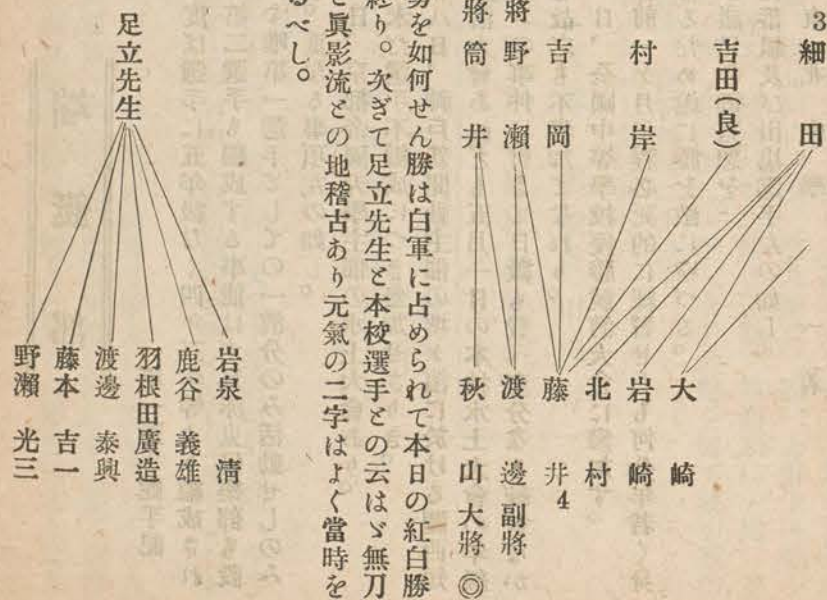


大將同志副將同志の一騎打實に目覺ましかりき岩泉の大喝一聲に白軍の凱歌は揚りぬ。

五年級紅白試合



大勢を如何せん勝は白軍に占められて本日の紅白勝負終り。次ぎて足立先生と本校選手との云はゞ無刀流と眞影流との地稽古あり元氣の二字はよく當時を語るべし。



本日の對校試合のメンバー及び結果次の如し。

○本工	校業	若林末次郎
○本工	校業	渡邊泰興
○本商	校業	木村健藏
○本商	校業	二橋五男
○本商	校業	山本平馬
○本工	校業	羽根田廣造
○本工	校業	北村己三郎
○本工	校業	鹿谷義雄
○本警	校業	成宮武清
○本警	校業	岩泉武清
○本警	校業	四級垣見久之進
○本警	校業	渡邊泰興
○本長	校農	三級新本吉安一忠
○本長	校農	二級奥田貴十郎
○本長	校農	一本本校野瀬光三郎

端艇部

第一選手蛇手記

本年度は選手に五年級なく四年三年等より編成され従つて第二選手も編成する事能はず又赤鬼俱樂部も設けられず唯第一選手としての一漕分のみ活動せしのみなりき。重なる事項左の如し。

五月八日、京都帝國大學主催の水上大會あり。

右は未だ選手不編成につき参加せざりき。

五月廿八日、神戸新聞社主催の堺ヶ濱に於ける關西短艇競漕大會あれども五月一日の本校本水上大會の年級レースの事件に付きて日數も費へ充分なる練習なかりし故之も不参加となれり。

八月一日、全國中等學校優勝競漕大會に参加す。

大會前一ヶ月半程必死的に練習せしも何分年若く身

小なるため遂に勝を敵にゆづる。

乞ふ諸兄の御寛恕を。

因に番組及び出場選手左の如し。

東北中學 一着

和歌山中學 三着

舵手	的場末吉
整調	池田潤藏
五番	本多一男
四番	藤堂兵庫
三番	梅本英太郎
二番	岩崎由太郎
一番	伊吹慈徹

野球部

野球部報

我が野球部は昨年、數多の卒業生を出だし、此處に一大更迭を來たり、ほとんど新顔そろいの我が選手は、四月十五日京都商友俱樂部の挑戦に應じ此處に本年の第一回の、練習試合を行ふに致れり。

午後一時半、大平、河合兩氏審判商友先攻に開始す

對大中戰

四月二十二日、我が部は大垣中學野球部を迎へ午後零時半より竹中、吉川兩氏審判の本に大中先攻に始まる。

大中振はず第三回に安打と敵失に三點を入れしのみ我が軍第一回に三點、第二回第三回に各一點、第四回に四點を入れたり。然るに先方の都合により試合

中	岡岡	藤岸	本山	淵村
彦	吉淺	辻後	村藤	青粕
	2	3	5	6
	3	5	6	8
	6	2	9	8
	2	9	8	5
	4	1	9	4
	8	4	1	8
友	村藤	井本	田本	村川
商	7	3	6	2
	3	6	2	9
	6	2	9	8
	2	9	8	5
	4	1	9	4
	8	4	1	8

は四回を以て閉戦となりたり。
當日のメンバー左の如し。

中彦	中彦
2 岡 吉	2 岡 吉
4 浅 辻	4 浅 辻
5 後 村	5 後 村
6 岸 合	6 岸 合
7 川 青	7 川 青
8 山 淵	8 山 淵
9 本 藤	9 本 藤
10 本 藤	10 本 藤
大中	大中
村 萩	村 萩
伊 藤	伊 藤
伊 曾	伊 曾
中 勝	中 勝
田 代	田 代
高 橋	高 橋

對八商戦

我が野球部は四月廿八日、年來恨敵八幡商業野球部を我が校庭に向へ戦へり。審判吉川、勝島兩氏我が軍先攻に午後三時始まりたり。

而して我が軍始め振はざりしも八九回の總攻撃に猛打して形勢逆轉し七對二を持つて我が軍の勝に歸す戦況左の如し。

第一回表 彦中吉岡三遊間安打に出でしも後援なし。

裏 八商無爲

第二回表 二死後西村、左翼安打に出でしも藤本の遊

捕にむなし 裏 八商無爲

第三回 兩軍無爲

第四回 兩軍相變らず無爲

中彦	中彦
岡 吉	岡 吉
浅 辻	浅 辻
後 河	後 河
村 西	村 西
奥 村	奥 村
藤 本	藤 本
彦	彦
捕 二	捕 二
三 遊	三 遊
投 左	投 左
一 中	一 中
右	右

對平安中學戦

五月六日、我が部は京都の勇、平安中學野球部を自校庭に向へ戦ふ、審判竹中本校先攻。

我が軍振はす第七回一點を得しのみ返し、平安第一回に一點、第二回に二點、第八回に四點を得七對一にて我が軍敗る。

メンバー左の如し。

中彦	中彦
岡 吉	岡 吉
浅 辻	浅 辻
後 村	後 村
青 山	青 山
粕 淵	粕 淵
橋 本	橋 本
藤 本	藤 本
彦	彦
捕 二	捕 二
遊 三	遊 三
投 左	投 左
二 右	二 右
一	一
平安	平安
藤 協	藤 協
西 森	西 森
牧 野	牧 野
川 本	川 本
樫 口	樫 口
出 路	出 路
小 惠	小 惠
平	平
中 三	中 三
捕 遊	捕 遊
投 左	投 左
二 右	二 右
一	一

五月二十三日、我が部は膳所中學に遠征し同校庭にて京都藥學専門學校と戦ふ、戦況及びメンバー左の如し藥專先攻。

第五回表 我が軍無爲、裏 八商一死後田中球に出で福原の遊捕失に田中生還福原三壘にある時、投手のボールに福原生還二點を先取す。

第六回 兩軍振はす。

第七回表 我が軍達然振はす。裏八商投手にはんろうさる。

第八回表 我が軍總攻撃にうつりたり。藤本二捕失に生き吉岡の四球におくられ、浅岡の三捕失に、満壘となる、辻の左翼安打に藤本、吉岡相次いで生還し後藤の左飛後河合の左安打に辻生還一點を勝ち越す裏八商軍無爲。

第九回 西村四球に出で一死後、藤本の投捕失に西村二壘を得吉岡の遊捕失に満壘の好機至り浅岡の左翼二壘打に西村、藤本生還辻の三振に二死となりしも後藤の左越三壘打に吉岡、浅岡生還せしも河合の投捕に後藤スタンディング、裏八商軍振はす、結局七對二、メンバー左の如し。

商	商
永 島	永 島
大 倉	大 倉
上 坂	上 坂
松 田	松 田
勝 見	勝 見
田 中	田 中
福 本	福 本
山 富	山 富
八	八
捕 左	捕 左
投 三	投 三
一 中	一 中
右 二	右 二
遊	遊

第一回表 我が軍無爲、裏林田、小西四球に出で牧野の投捕暴投に満壘となり木村又四球に林田生還小橋三振せしも長谷川又四球に小西生還野村の安打に牧野生還せしも木村本盗してさる。

第二回 兩軍不振

第三回表 我が軍不振 裏米田の安打ありしも後援なし。

第四回表 我が軍辻の安打ありしのみ。裏藥專二死後林田遊失に出で二盗後小西四球を得しも牧野の中飛に空し。

第五回表 一死後奥村安打に出で吉岡の遊捕失に送られ浅岡の安打に満壘の好機至りしも辻の一飛後藤の遊直に空し。裏小橋の安打ありしのみ。

第六回 兩軍無爲

第七回表 我が軍不振、裏牧野四球に出で木村遊捕一壘失に三二壘により一死後小橋の安打に牧野生還長谷川遊直野村右飛。

第八回 我が軍後藤の安打ありしのみ、裏一死後林田パン、に生き小西の投飛後二盗し牧野の安打に林田生還一點を加へも木村投捕。

第九回 兩軍空しく遂に六對零を以て我が軍敗る。

中		彦	
岡岡	藤岸本野村	吉淺	辻後村藤橋淺奥
捕二遊	中左投一三右	捕二遊	中左投一三右
專		藥	
田西野村田橋川村倉	林小牧木米小谷野家	中左三投捕一	二右遊

五月二十日、我が部は敦賀商業を迎へ戦ふ、彦中先攻
第一回表 吉岡、奥村安打に出て河合二飛、此の間に三盗に刺され後藤右飛に終る、裏敦商振はず。

第二回 兩軍無爲

第三回 我が軍不振、裏敦商田邊左翼三疊打に出て一死後吉田の二疊打に田邊生還一點を先取せしも後援なし。

第四回表 我が軍凡退 裏大橋三疊打に出て二死後岡田邊、松原の三疊打に三點を入れ吉田又亦三疊打し更に一點を又新田の二疊打に吉田生還計五點を得。

第五回 兩軍振はず。

第六回 表吉岡の左飛後奥村遊飛失河合二飛失に出

後藤の三匍に奥村生還村岸左飛驛飛に河合生還 裏松原の四球と敵失に更に一點を加ふ。

第七回表 我が軍不振 裏大橋四球を利し二死後岡の左飛失に大橋生還せしも後援なし。

第八回、第九回兩軍空しく七對二にて我が軍敗る。

京津大會

昨年本大會に於て、優勝戦に立命館中學の爲め敗れたる我が部は此處に又必勝の意氣を以て、大會に参加する事となしたり。二十六日(七月)と云ふに彦中合宿を出で京都にと向わり。然るに降雨の爲め大會は延ぶるの止むなきに至り、此處に於て我が選手は空しくその日を送りやゝ一同の心にゆるみの生じたるは止むを得ざる處なり。

第一回戦不戦一勝

第二回戦に於て、京商と戦かふ事となれり。彼は洛陽の優なり。而して我れは昨年彼を敗りし者なり。されども、我が選手の大半は練習の日尙淺く場なれせざる爲め、稍逆上の氣味ありたるは止むなき處なり。

二十九日午後一時より戦いは開かれたり結局

十四A對七を以て惨敗し永き恨みを含んで此處を去れり。唯熱誠なる御後援を厚く感謝すると共に此の惨敗をわび入り止まざる次第なり。

尙當時の戦況及びメンバー左の如し。我が軍先攻

第一回表 吉岡四球に出て淺岡の三振後辻遊失に送られしも後藤の投匍藤本の三振に空し。裏三者凡退

第二回表 淺野右横二疊打に出て村岸四球を利す此の間に淺野三盗に生き捕手暴投に先づ一點を先取し奥村のバントに村岸生還せしも後援なし。裏、八田

死球に出で黒川の安打西池の安打に八田生還し政田四球を得小野の投匍失に黒川生還次いで湯川の遊匍後池垣四球に出で西池生還す續く伊藤安打して政田小野生還し計五點に入る。

第三回 兩軍無爲

第四回表 村岸匍失に生き橋本の二匍惡投に村岸三疊に送られ奥村とのスクイズブレイ奏功して村岸生還橋本三疊に至る奥村二疊に生く好機至る吉岡の右翼横を抜く絶好の二疊打に橋本奥村相次で生還し淺岡辻の投匍に吉岡生還せしも後援なく一點を勝ち越

中		彦	
岡岡	藤岸本野村	吉淺	辻後村藤橋淺奥
捕二遊	中左投一三右	捕二遊	中左投一三右
商		京	
垣藤丹田池田野川	池伊伊八黒西政小湯	中二遊	投左三右捕一

京津大會に惨敗せし我が部は来るべき岐滋二縣野球大會には是非優勝せん者一同其の日を待つ。
然るに、はからずも後藤遊撃手は不慮の死に合ひし我が部はさびしさを感ずるに至れり。

されど先づ大會の練習試合として九月九日八幡商業に遠征す。戦況メンバー左の如し 八商先攻

第一回表 大會四球に出で二盜後富田遊失に出でたり
勝見三振後上坂の安打に二者生還續く二者三振。裏我が軍不振

第二回表 三者凡退。裏、二死後村岸安打に出で橋本遊失に走者三二壘に粕淵四球に出で捕手一暴投に二者生還す。

第三回表 富田敵失に一點を加ふ。裏、奥村遊失に出で二盜後吉岡の中左間安打に奥村本盜して殺され吉岡又三盜に刺さる浅野安打に出で二盜後捕手暴投に生還す。

第四回 兩軍無爲

第五回 兩軍振はず

第六回表 八商不振。裏、二死後橋本、粕淵敵失に相次いで生還す。

第七回表 八商永島の安打松田の二壘打ありしも後援なし。裏、吉岡四球出で浅野の安打に三壘に至る浅野二盜せんとして刺され藤本の中飛失に吉岡生還、辻の遊失に村岸の一匄に藤本生還、辻又三盜、捕暴投に生還す。

第八回、第九回 兩軍空しく八A對三にて我が軍の勝に歸す。

商	八	中	彦
倉田見阪島田本中原	大富勝上永松山田福	左遊一投捕三二中右	奥村岡野本岸本淵岡 吉岡浅藤辻村橋粕淺 中捕投三遊左一右二

庭 球 部

庭 球 部 より

富田忠之記

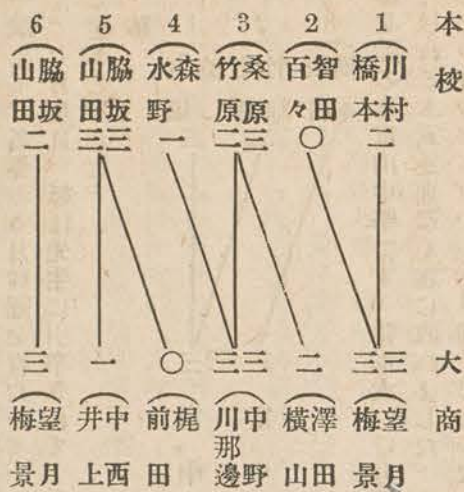
五月三日、

膳所中學主催縣下中等學校春季庭球大會參加之記

戦 績

第一回戦不戦

第二回戦



此の日我が部選手は全力を盡して、よく戦ひましたが、悲し哉選手五組の中、三組は四月から新たに選手となつたもので、未だ充分の練習を積む事が出来な

つた爲と、此の度の戦が、今年度、最初のものでしたので、選手のすべてが、幾分「上り」氣味でしたから充分其の技を發揮することが出来ず、遂に、新進の大津商業に勝をゆづりました。
然し（脇坂、山田）組の奮戦は勇ましく賞賛に値するものでした。
諸君の熱誠なる後援を感謝致します。

夏季練習の記

長い一學期も夢の中にすぎ、苦しい試験も終つて、楽しい休暇が参りました。諸君の中には、山や海で、思ふ存分、手足を伸して此の大自然に接し、大いに浩然の氣を養はれた方もあるでせう。又慈愛深き両親の下で楽しい團樂に酔はれた方もあるせう。

此の時、我が部選手は人氣のない、淋しい道場に合宿して、本校庭球部の爲に、新たに組織して下すつた後援會々員諸氏の熱心な御教導と叱咤の聲に勵まされて、汗と、泥とで彩られた、ユニホームに身を固めて、朝は七時から、夕はボールの見えなくなるまで懸命の練習をして、卅日無事夏季練習を終りました。